

大坂城絵図の種々相、特徴ある絵図群

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原道晴

はじめに

NHK大河ドラマに大坂城真田丸が決まり、上田市真田郷はますますにぎわいを増している。もともと真田人気は高く、真田氏の上田城は関ヶ原のあと、徹底的に破壊され、廃城となり、寛永3年仙石忠政によって再築され、さらに松平氏によって明治まで引き継がれる。従って今の上田城に真田の痕跡は残されていない。真田氏の上田城は謎に包まれたままである。しかし、上田市真田郷は真田氏の発祥の地であり、新幹線上田駅を始め、市内には6文銭の旗印がたなびいており、上田イコール真田との思いが深い。

富原文庫が最初に催した展示会も上田商工会議所の依頼で開催した「真田太平記の舞台 戦国時代の城と合戦絵図展」であった。この展示会は平成10年11月に1週間、上田商工会議所の主催で会議所5階大ホールにて7日間開催され、約1300人の来場をいただいた。展示会は池波正太郎真田太平記館開館記念として、市街地活性化を目的として開催された。武田時代の真田から、大坂の陣まで、140点の古絵図、錦絵を展示し、戸石城がパノラマのように展開する素晴らしい会場で戦国時代を満喫していただいた。

真田では上田市真田郷にある真田氏歴史館で平成25年、26年と連続して真田の城展を開催した。25年は「真田家の城郭とその戦歴」として、城絵図と合戦図、錦絵を展示、26年は「大坂冬の陣展」で所蔵する100余枚の大坂城関連絵図の内、大坂冬の陣絵図、錦絵10数枚を展示、何れも1ヶ月半で25年は11000人、26年は9900人の多大な見学をいただいた。此の時の展示絵図の内、大坂冬の陣図は11月発売の宝島社「戦国最強真田の戦い」にも収録された。

1・豊臣徳川大坂城

真田の上田城が徳川政権によって、壊滅させられたように、豊臣の大坂城も同じ運命を辿った。昭和35年の学術調査まで、一般には今の大坂城は豊臣のものと認識されていた。それほどに浪速っ子の太閤最期はすごかった。調査によって、大坂城のすべての石垣に徳川大名の刻印が検出され、今の大坂城は全国諸大名64家による元和新規築城と判明した。もっとも、明治以降一部の研究者はそれを認知していたが、一般には周知されなかった。従って、昭和6年大坂夏の陣黒田屏風によって復元された大坂城天守閣は、場所も、天守台も違う徳川大坂城天守台に豊臣大坂城天守が立っていることに成る。しかし、それは日本最大の防衛力を誇る、江戸幕府の西日本支配拠点、今の大坂城跡遺構価値を損ねる物ではない。昭和以降の復興天守は地域活性化のシンボルであっても、それはもはや城ではない。単なる観光資源に過ぎない。ありもしない城郭復元図が、さも真実である様に闊歩しているのと同様である。大坂城は日本の誇る世界最大規模の城郭として、遠く欧羅巴にまで伝えられた。豊臣大坂城屏風がオーストリアの古城で発見されたのも近年の事であり、

徳川大坂城も1660年頃ごろにはオランダ西インド会社が絵図を作成し、ヘーグの国立文書館に所蔵され、1680年頃のモンタヌス日本誌挿絵大坂城図の原画といわれている。此の図は1982年にオランダ国立中央文書館所蔵ヴィングボーンズ図版集として復刻された。第74図に大坂城鳥瞰図が収められている。

大坂城の絵図は全国の譜代大名が大坂城代に赴任したため、全国の大名家に所蔵されている。大坂城代だけでも1619年の初代城代高槻城主内藤信正から、1868年幕末の常陸笠間城主牧野貞明迄、70人が赴任している。加番、定番、大番衆等の役職を加えると作成された絵図は軍学絵図を除外しても1000枚を超えられると思われる。従って、幕末の残存した大名家のほとんどに大坂城絵図は保存されている。廃絶となった大名や関連部署の武家文書として、絵図の一部は市場に流通された。城代等の名前が絵図に記入されていると、絵図の年代を確実に捕捉できるし、簡単には天守の有無で江戸初期かどうか判別できる。今回は所蔵大坂城絵図100点余の中から、一般に知られていない特殊な絵図を紹介したい。

2・豊臣大坂城本丸図 史上5枚目、現存4枚目

昭和12年青山学院大学の桜井成広によって、参謀本部で発見され大阪毎日新聞に発表された本図は後に謎の大坂城地下石垣が豊臣大坂城であることを実証した貴重な絵図であった。桜井の大坂城関連資料は没後、公のルートで手元に入手することが出来た。それは、戦災で焼失した参謀本部絵図の白黒写真「山鹿図大坂城本丸」、桜井による透写着彩絵図「山鹿図大坂城本丸」後者には桜井の筆跡で「陸軍築城部本部本邦築城史編纂委員会保管品、偕行社所蔵品、昭和11年春、桜井成広模写、昭和12年2月28日大阪毎日新聞に発表、現品は昭和20年の空襲にて焼失せり」とあり、始めて、本図の履歴が明らかとなった。桜井の資料は豊臣大坂城の復元図や「山鹿図城塞繹史所収」と書かれた謄写絵図等数十枚に及ぶ。本図は後に大工頭中井家で2枚、広島浅野家の諸国古城の図で1枚発見され、近年、小生も他の城絵図に紛れて、本図を発見した。従って、これまでに5枚、現存4枚である。本図がなければ、豊臣大坂城の解明は不可能であった。画像は最後に発見された富原文庫所蔵絵図である。「摂州大坂本丸」とされ、軍学の目的で写されたため、防衛上関係のない本丸天守郭の御殿や本丸表御殿は簡略化され、石垣線は忠実であるが、いかにも写しという簡略な絵図である。それだけに本図が軍学目的の写図で今後も発見の可能性があることを明示している。本丸以外の豊臣大坂城絵図も発見されているが、野戦であった大坂夏の陣と違い、先行する大坂冬の陣は家康が苦手とする城攻めであったために、大坂冬の陣絵図には大坂城の全景を伝える物も少なくない。

2・慶長19年大坂冬の陣天満口陣取図

12月28日大坂冬の陣における天満口丹波亀山城主岡部長盛と宣勝の陣取りを描く。元禄14年の写しであるが、鉄砲除けの築山や仕寄りの土塁、堀を以て、ジグザグに掘り進める様は明治の日露戦争の塹壕を見ているようである。256騎を含めた総勢3998人の役割、配置、柵、陣幕、虎口、建物を描画し、天満橋への攻略の様子を描く。大坂陣

絵図は多いが、このように攻め方の詳細を記されたものはほとんど見られない。同様絵図には、貞山様大坂御陣図と記された仙台伊達政宗の大坂陣陣立図と御本陣坐備があるが、陣形のみで仕寄りや柵、築山は描かれていない。

3・大阪落城図 いわゆる最上屏風

家康が山形城主最上家親に書かせた大坂夏の陣屏風といわれるもので、各地に伝本が存在する。富原文庫も3種所蔵しており、一本に「大阪落城之図一張者東照宮御直二被仰付御留守番江被下置」、別本に「大坂落城之図温故堂蔵」とある。彩色、模写年代に差異はあるが、原本は同一であり、一部は二曲半双屏風であるという。

4・大坂城丁場割絵図2期・3期

徳川大坂城は64州の大名による徳川幕府の天下普請である。あの巨大な石垣の構築分担絵図が残されている。丁場割図が現存するのは、知る範囲で名古屋城、江戸城、大坂城、二条城のみである。古くは元寇防塁でも割普請といわれる工区割がされたが、遺構の刻印に見るのみである。この絵図と現存大坂城の石垣刻印が一致して、今の大坂城が徳川製と認知された貴重な絵図である。

手元にあるのは3種で、1枚は「大坂御城御本丸石垣之図」とされ、寛永元年から3年に掛けて実施された大坂城第2期工事の分担が記入されています。58大名が動員されましたが、絵図には62大名の分担が記入されています。1枚は岡山藩に伝来したと思われる大坂城丁場割図で、池田新太郎光政が岡山藩の前、鳥取藩主の時代、第2期の天守が完成し、第3期の南外堀の際に全体の分担を明示したもので、芳烈公と記されています。1枚は大阪府立図書館本「大坂御城御普請丁場割之図」の筆者による模写絵図です。

5・美しい完成された大坂城絵図

徳川大坂城の年代は城代等の人名検索と、簡単には徳川天守が築後40年寛文5年1665年に落雷で焼失しているため、天守の描かれる江戸初期の絵図とそれ以降に見分けられる。1枚は城代屋敷に阿部備中守と書かれた2代城代岩槻城主阿部正次時代の絵図で天守も描かれている。1枚は大坂御城全図とあるが、天守焼失後に絵師によって、美しく描かれた大坂城絵図で、同一のものを2枚所蔵している。大坂城絵図のほとんどは天守焼失後描かれた撰営秘録等の絵図がほとんどである。軍学用途では柳営秘鑑、主図合結記、浪花軍記等にも描かれ、広く流布された。

6・鳥瞰図として描かれた大坂城

大坂城を描く江戸中期の3幅対の掛軸がある。右層に天守台、三層櫓、中央に淀川と二の丸二層櫓、左層に天満宮を描く、六曲屏風の半分かと思えるほど、天守台から南は描かれていない。しかし、絵柄は天守台の線で終了しており、もともと、三幅対であったと思われる。また、御城秘図のように大坂城平面図でありながら、櫓御殿等を立体的に描く絵図も多くみられる。

7・江戸初期大坂城修理願絵図と江戸中期修理完成図

武家諸法度で大名の城郭修理は絵図による修理個所の報告、老中奉書による許可という

手続きで行われるが、大坂城のような幕府直轄城郭の修理の実態は明らかではない。本図は松本藩から出たとされる。松本藩主水野忠職の大坂城代は3回あり、何れも江戸初期1652年から1662年の11年間に2-3年ごと7年間である。地区ごとに色分けして、修理伺い月が付箋で添付され、修理担当部門、修理箇所、修理内容として、「隅木4本の内1本損」等詳細に記入されている。修理願も城代や破損奉行等17職から出されており、修理規定が完成していない時期の様子をうかがうことが出来る。後の絵図には各地区ごとに、御本丸御破損小屋、玉造御破損小屋、地役御破損小屋、御加番御破損小屋、京橋御破損小屋追手御破損小屋や御破損方が設けられ、城代を通じて老中に修理願が出されたものと思われる。

大坂城の修理絵図は各地で残存する、天保14年1843年の大坂城惣修復絵図は大阪城天守閣に、安政7年1860年の簡単な修理絵図と記録は富原文庫に、江戸中期の巨大な山里曲輪絵図も市場に出た。富原文庫所蔵の絵図は延享2年1745年山形城主大坂城代堀田相模守正亮の修復願に対し、寛政5年1793年約50年かけて行われた大修理の御破損奉行から提出された完成絵図の控である。御城代上屋敷絵図、大坂御城東御番衆小屋絵図、追手御城代屋敷絵図、東大番頭小屋絵図、中小屋御加番絵図、御本丸並山里丸絵図の6枚に慶長19年11月26日大坂鳴野蒲生合戦之図明和9年1772年写が付、7枚である。今回は展示中の御本丸並山里丸絵図を紹介する。

8・幕末大坂城口固絵図、錦絵

絵図名から見ると戊辰戦争に対応した大砲の配備を想定するが、描かれているのは大坂城役職の交代日程のみで、特にお固めと称する記載はない。戊辰絵巻に大坂城天守台が登場する他、この時期、瓦版に多く大坂城が見られる。大坂城最後の姿として、地図ではないが、幕末、上方浮世絵師一養斎芳瀧の手になる見事な紅蓮の炎に包まれる「城中大火図」を以て、大坂城絵図紹介の最後としたい。

9・まとめ

大河ドラマに合わせて、大坂城を取り上げてみた。大阪生まれで、24歳まで在住、ついに、故郷に帰ることはなかったが、何かにつけて、懐かしい。大坂城絵図地図資料の目録は10年以上前に編纂したことがあるが、その後の増加を含めて、豊臣大坂城から幕末まで体系的に絵図の整理を行ったのは初めてである。ドラマが放映される頃には上田も大坂もにぎわっていることと思う。上田氏歴史館、上田城跡、池波正太郎真田太平記館、上田市立博物館、真田館、真田本城をぜひ見ていただきたい。機会があれば、大阪か上田で今回紹介の絵図を中心に大坂城絵図展を開催したいと考えて居る。